

『学院史編纂室便り』発行再開によせて

関西学院院長・関西学院大学神学部教授 中道 基夫



『歴史とは何か』

45年ほど前になりますが、関西学院大学神学部1年生の授業でE.H.カーの『歴史とは何か』を読み、レポートを書くという課題が出されました。その時この本の内容をよく理解できたわけではありませんが、一つの衝撃を受けたのを覚えています。高校で世界史や日本史を習い、教科書に記載されている歴史的事実を覚えるという勉強をしてきた者に、この本は歴史についての新しい認識を与えてくれました。その当時の私は、動かしようのない中立的な歴史的事実というものがあり、その連続性と関係性を綴っていくのが歴史だと理解していました。しかし、カーによれば歴史的事実自体が客観的に存在するのではなく、それも歴史家が数ある出来事の中から一つの出来事を選択し、それに意味を与えることによって歴史的事実が生まれるというのです。そこには、歴史家自身の社会的、個人的背景、そして思想が影響を及ぼすこととなります。歴史そのものは客観的なものではなく、主観的な要素を含むものであり、歴史家の選択と解釈が変われば歴史は大きく変わるという主張に驚き、歴史とはいったい何だろうかと考えさせられました。このような認識を持つと、暗記の対象であった冷たい歴史が、表情を持つ生きた存在に感じられてきました。もちろん、歴史家は資料に基づいて客観的に歴史を綴っており、フィクションを描いているわけではありません。しかし、この歴史がどのような背景を持って「歴史」となっているのかを読む目が必要であり、そして、今日、私たちはどのような歴史を綴ろうとしているのかということを顧みなければならないということを教えられました。

言い換えるならば、歴史を綴るということは、過去の連続する事柄を客観的に再構成するということですが、それ以上に何を大切にし、何を現在に訴えたいかという現代の思想の表明であるとも言えます。また、これまでに叙述されている歴史も、一体どのような歴史観のもとで描かれたものであるのかを知る必要があります。

このように考えるならば、関西学院の歴史を編纂するという作業も、単に史料を収集し、それを整理し、過去の興味深い出来事、人物の業績を掘り起こすというだけではないと言えます。学院史編纂という仕事は、現在、一体どのような出来事や人物に注目し、どのような解釈によって歴史的事実を選び出し、それらをどのように繋ぎ合わせようとしているのかを問う作業でもあります。

関西学院の歴史を問う

1998年に『関西学院百年史』（通史編Ⅱ）が刊行されて以降、社会全体が大きく変化すると共に、関西学院も大きく変わってきました。『関西学院百年史』は神戸三田キャンパスと総合政策学部の開設の報告と阪神・淡路大震災に関する数行の記載で終わっています。2008年以降、初等部ができ、学校法人聖和大学、学校法人千里国際学園と合併し、関西学院大学にも新しい学部と研究科が開設され、関西学院は幼稚園から大学院までを持つ総合学園へと大きく変わりました。そして、現在、関西学院の発祥の地である王子公園に新しいキャンパスを作ろうとしています。

「関西学院は、1889年9月28日にアメリカ南メソヂスト監督教会の宣教師W.R.ランバースにより創立された」という文言は、関西学院のあらゆる文書の冒頭に書かれており、関西学院の歴史的事実です。しかし、これだけが関西学院の創設の歴史ではなく、様々な創設の歴史的事実を持つ学校が一つになって現在の関西学院が成り立っています。かつて関西学院が上ヶ原キャンパスの中学部・高等部・大学だけで成り立ち、その視点から描かれていた関西学院の歴史を、今後どのように描き、どのような歴史を共有していくのが問われています。

2023年度は『学院史編纂室便り』を休刊していましたが、この度全面リニューアルされ『学院史編纂室便り』の発行が再開されましたことを心から嬉しく思っています。それは単に再開の喜びだけではなく、これからの学院史編纂室の働きに期待する喜びでもあります。

関西学院の歴史を綴っていくということは、単に歴史を掘り起こし、興味深いエピソードなどを紹介することではなく、たえず関西学院の過去の歩みを検証しつつ、その歩みを未来に継承していくことだと考えています。学院史編纂室の働きが、そしてこの『学院史編纂室便り』がそのような関西学院の歴史を創り出すプラットフォームになることを切に願っています。

(なかみち もとお)